

地域で見守る 子育てで! 子育て!

子どもへの叱り方について

子育てをしていると子どもがいうことをきかずにイライラしてしまうこともあると思います。イライラして子どもに「怒る」と子どものために「叱る」とは異なります。子どもが社会のルールを学び、成長していくために「叱る」のです。

叱り方のポイント

①子どもの目を見て短い言葉で

子どもが動いているときに声をかけても耳に入っていないことが多いため、目を合わせて簡単な言葉で伝えましょう。

②否定ではなく肯定の言葉で

「ダメ」とばかり伝えていても、子どもはどうすればいいのかわからないことがあります。どうしていけないのか理由を簡単に伝え、どうしたらよいかを伝える方が効果的です。

③子どもは同じ失敗をくり返す

子どもは何度同じことを伝えても同じ失敗をくり返します。その都度、根気よく同じことを伝えていけば、しだいに身についていきます。

④叱ったあとのフォローも必要

いつまでもひきずらず、叱ったあとは気持ちを切り替えて接してください。

子どもといっしょにまわりの大人も成長していきましょう。

問合せ先 いきいき広場内保健福祉グループ ☎52-9871



コラム

認知症とこれから

今月のテーマ 「私の意思」

国は、認知症に対する取組みのなかで「認知症になっても本人の意思が尊重され、できるかぎり住み慣れた地域のよい環境で暮らし続けることができる社会」の実現をめざすとしています。そのため、さまざまな計画や社会資源の構築を進めています。

この『本人の意思』とは何でしょうか。あなたは、認知症となり、意思を伝えることが困難となったときのために、自分の意思を家族や周囲に伝えてありますか。

エンディングノートというものがあります。元気なうちに自身の延命措置や葬儀の希望、遺言、家族・友人に残したい言葉などを書いておくことが多いのですが、介護、認知症ケアにも役立てられるとして注目されています。

要介護状態や認知症になると、本人からはどんな介護を受けたいかなど十分な情報を聞き出すことが難しくなることがあります。そのため、ともすると周囲の人がそれぞれの価値観で介護し、本人らしさが尊重されないこともあります。本人の希望、好き嫌いがわかれば満足度の高いケアに結びつけられます。

また、認知症は最近の記憶は失われますが、昔のことはよく覚えています。楽しかった思い出、嬉しかったこと、大切な人の記憶をケアする人が知ることができたら、幸せな記憶に戻り、ほっとできる時間を提供できるかもしれません。最期のためではなく、幸せな老後を生きるために書くエンディングノート。フランスの作家 アンドレ・マルローは「僕が死を考えるのは、死ぬためじゃない。生きるためなんだ。」と述べています。

認知症になっても自分らしく生活するためには、社会資源が増えるだけでは不十分かもしれません。私たち自身が、少しの準備をしておくことで、高齢を生きる自分に、喜びをもたらせるのではないのでしょうか。

認知症についての相談、認知症家族の会に関する問合せはコチラへ

いきいき広場内福祉まるごと
相談グループ ☎52-9610